

247 中央大学招待会

〔『法学新報』第19卷10(225)号 明治42年11月1日〕

○中央大学招待会 中央大学に於ては講師金井松本の二氏は欧米より帰朝し織田、勝本、雉本の三博士も亦出京中なるを機とし去月二十六日午後五時より校内に於て各科講師の招待会を開催したり当日は細雨霏霏として至り冷気肌に迫りしも賓客続続来会せられ定刻に至るや一同兼て階上倶楽部に設くる所の宴席に著き酒数行菊池学長は起て開会の辞を述べ且つ講師諸氏の意見を求め金井博士其他珍客には一場の談話を要求したり是に於

て金井博士は旅行中所感の一節として伊太利を論し其氣候温和にして山川風光の明媚なる同国は古来世界旅行者の遊園たりしか乞食の多きこと旅人相手の職業者多きこと交通機関の従業者間に賄賂公行なること等輕薄風を成し民心の腐敗驚くに堪へたり偶々先年来我邦に於て旅館及び交通機関を完備して旅人の便を計り大に外客を招致して我国を世界の遊園たらしめんとするの議ありしを想起し伊国の現状を視て覚へず戰慄したりとて一

滝本美夫、高橋五郎、根津千治、中島信虎、南日重治、村上恭一、卜部喜太郎、野村嘉六、山田三良、山田喜之助、松浦和平、松浦与三松、前田定之介、福田秀猪、福間博、江木衷、青山衆司、青木昌吾、佐藤正之、雉本朗造、菊池武夫、三浦恵一、三宅碩夫、広井辰太郎等の諸氏とす

一実例を挙げて面白く談せられ次に勝本博士は余は伊国に五ヶ月間滞在したりとて伊国の状態に付き金井博士の言を賛し且つ斯かる状態は仏国巴里の如き同様にて輕薄に走り華美を競ふの仏人は何所やら日本人に似通ひたる点あり流行気なることの如きは其一にして丁度日本人か煙草はトルコかエジプト葡萄酒は仏蘭西と云ふか如き風があるか余は最も淳朴なる独逸人を愛し日本人も其風に習はんことを希望す元來煙草は日本煙草にて富士可なり敷島宜し酒も葡萄酒や「セリー」に及はず日本酒にて可なり御馳走も亦然り箇様のことは教育の根源たる学校杯マツより之を実行すること宜しかるへければ本学にても今後は改められは如何とて諄諄と説述せらる山田奠南氏は今後偶には御馳走の鮪の刺身に熱爛ならんことを要求して冷灰博士の賛成を求めらるるあり満座哄笑歛談興の罄くるなく十時を過ぐる頃漸く散会したり当日の出席者は石田安治、石原純、石山彌平、伊藤悌治、花井卓蔵、馬場鉄一、葉山万次郎、原嘉道、堀竹雄、アーネスト、ルース、岡田実麿、岡内判蔵、岡村輝彦、奥田義人、鷺見亀五郎、河田烈、勝本勘三郎、片山寛、金井延、高島捨太、